

科学と社会委員会（第24期・第3回）議事要旨

1 日 時 平成30年4月4日（水） 12:00～13:30

2 場 所 日本学術会議5階 5-C（1）会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、小林 傳司（第一部会員・副委員長）、
小安 重夫（第二部会員・幹事）、遠藤 薫（第一部会員）、藤原 聖子（第一部会員）、
松浦 純（第一部会員）、西村 いくこ（第二部会員）、平井 みどり（第二部会員）、
古谷 研（第二部会員）、坪井 俊（第三部会員）、中村 崇（第三部会員）、
藤井 良一（第三部会員）、沖 大幹（連携会員）

（欠席） 甲斐 知恵子（第二部会員）、高橋 桂子（第三部会員・幹事）、
蟹江 憲史（連携会員）

（事務局） 糸川参事官、酒井参事官補佐、高橋参事官補佐、鳥生審議専門職

4 議事要旨

（1）各部でのSDGsについての議論の報告

●上記について各部より報告があった。主な内容は以下のとおり。

【第一部】

- ・ICSUのレポートを日本に当てはめた場合のレポートを出してはどうか、あるいは人文・社会系版の目標やシナジーをデータに基づき分析した文書を出してはどうか、学術会議でそれを行うのが難しければ、国際社会科学評議会にテーマとして投げかけてはどうか、との提案があった。
- ・産業界がSDGsに積極的なのは、この先50年くらいのビジネスのルールを作っていると見なしているからである。SDGsであれば誰も文句を言えなくなるようなことも考えられるので、そのような状況も見つつ、単に取り込まれないよう、しかし、同時にこちらの考え方で活用するようにする必要がある。
- ・一方、理工系においては、特定の開発目標掲げる研究は限界で、「何をすべきか」から議論をスタートしなければならなくなっている。その観点から人文・社会系に参加してもらいたいという要望は高まっているが、日本の人文・社会系はそのようなニーズに応える人材育成が弱い側面がある。

【第二部】

- ・SDGsに直ちに当てはまらない基礎研究もあり、評価に使うべきではないのではないか。
- ・一方、社会実装を目指す研究の場合は、SDGsに縛られるつもりはないが、物差しとして使えば良いのではないか。

【第三部】

- ・SDGsは必ずしも日本にぴたりと当てはまるものではないので、日本らしいもの、日本らしいやり方を提言出来れば良いのではないかと。敢えて境界を曖昧にすることが日本の感覚としてあり、SDGsには無いところなので、そのような点を強調するのも一案である。
- ・これからの提言だけでなく、学術会議の過去の活動の振り返りを行う必要があるのではないかと。
- ・SDGsのブリッジをどうするか。17目標の間に落ちたものを拾うべきではないかと。
- ・学術会議の過去の提言をマトリックスにして、欠けているところをフォローすべきではないかと。
- ・提言を作るとき、これはSDGsのこの目標に適っているというラベルを張るようなこと

をしてはどうか、という提案があった。

(2) 科学と社会委員会で取り組む課題の進め方について

- (1) の報告を受け、科学と社会委員会として SDGs への取組をどう進めるかについて議論があった。主な内容は以下のとおり。

(A) SDGs に支配されない学術

- ・ SDGs のステータスがわからない。これを目的に学術をやっているわけではない。結果として SDGs に適うというのか、それとも、トップダウン的に見て足りないところに学術を誘導しようとするのか。
- ・ 学術が SDGs に縛られるのは問題。他方、地球規模の課題に取り組む際、社会実装に向けて何らかの物差し、共通言語があった方が良いという点はある。
- ・ 理学はバウンダリがなく、それを突破するもの。工学はバウンダリがある。この区別がつかないまま、評価に使われるのは問題。

(B) 社会に対する責任としての学術から SDGs への貢献

- ・ 学術は伝統的にはボトムアップだが、研究費は税金であり、研究者のボトムアップだけという説明では厳しい。JST のテーマ設定でも誰のため、何のために研究しているのかによりファンディングの方向付けがされている。歴史的に見ても、アポロ計画について数人を月に送ることに何の意味があるのか問われた。Social relevance、社会にとってどういう意味があるかが問われる。SDGs はその正当化につかえるのではない。
- ・ 昨今の研究政策は出口指向だが、これをけしからんといっても止めようがない。そこで SDGs を出口として利用できるのなら良いのではない。
- ・ 米国の研究者は自分の研究が何故必要か、滔々と述べることができる。
- ・ 自分の研究の意義を語れず、理学部や文学部がボロボロになっている。21 世紀になって PhD が減っているのは日本だけ。今のやり方は根本的に間違っている。
- ・ 科学者が自分の研究を戦略的に語れないのは、自分自身が分かっていないということ。SDGs という外圧がかかったことで、自分の研究の意義を反省し、考え直すチャンスになるのではない。一方で外からやってきた評価軸により評価疲れしてはいけなので、学術側でイニシアチブを取り、理想の評価を開発する必要がある。そのためにも自らを相対化する能力、言語能力・説明能力を鍛えていくべきではない。
- ・ 工学分野から見ると社会に役に立たないのはナンセンス。SDGs は当たり前話であり、気にする必要もない。SDGs は手段として使いたいように使うだけの話。科学と社会の関わり合いをきちんと確立していることが重要。産業界は SDGs を徹底的に使おうとしているが、振り回されないようにすべき。
- ・ SDGs は目標だが、政府などは明らかに手段として使っている。そういう意味で、提言などの前書きで使うのは真つ当な使い方と考える。

(C) 提言の構造化

- ・ 過去の提言・報告のストラクチャーの調査・構築を学術調査員に頼めないか。

(D) 若手の参画

- ・ 若手の意見も聞きたい。
- ・ SDGs の良さは分かるが、若手研究者の応用志向が強くなりすぎて、「やってみたい」という若い芽を摘むようなことはしたくない。

- ・若手には、研究そのもの以外の余計なことをするんじゃないというプレッシャーがかかっている。しかし、是非やるべき。また、すぐに「あれか、これか」のような極端な議論になりがちだが、それではいけない。ボリューム感が必要。研究者全員が SDGs をやる必要はないが、そのような観点も必要である。一方、SDGs に直接関係のない深い基礎研究は全く必要ないということでもない。

(E) 学術会議からの提言

- ・芸術分野が欠けているように、今の SDGs では人類の Well-being を達成出来ないという提言をする方が、学術会議としては意義があるのではないか。

- 学術会議の SDGs への取組を紹介するストーリー作りについて議論があった。主な内容は以下のとおり。
 - ・SDGs に関連する学術会議の提言・報告をストーリーに基づいて紹介し、HPで公開してはどうか、との提案があった。
 - ・提言は元々、社会的意義を考えて作っているのだから、そこに更に SDGs のストーリーは本当に必要だろうか。
 - ・提言等の作成の趣旨の解説のツールとして SDGs を絡めたストーリーを使うというのが良いではないか。
 - ・まずは、提言を出した部がストーリーを作るのが良いのではないか。
 - ・既存の提言・報告を使ってストーリーの試作版を作ってみてはどうか。
 - 第一部（藤原委員）、第二部（第二部委員で相談）、第三部（中村委員）において、それぞれストーリーの試作版を作成し、次回委員会で議論することとなった。
- 今後は、①上記のストーリー作り、②日本の学術からの SDGs への提言、の2つについて進めることとなった。
- 次回委員会においては、蟹江委員から SDGs とFEの関係についてヒアリングを行うとともに、岸村代表をはじめ若手アカデミー構成員を呼んで議論することとなった。

(3) 各分科会の進捗状況報告

- ・時間の関係から審議出来ず。

以 上